

シルクロードが世界遺産に

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

新聞各紙はユネスコが6月15～25日に、カタールで行なわれた世界遺産会議で「シルクロード」を世界文化遺産として推薦しました。群馬県の「富岡製糸場と絹産業遺産群」と同時に認定されました。

申請された「シルクロード」は、長安から「天山回廊」を経て中央アジアに至る部分、前2世紀から紀元1世紀ごろにかけて各都市を結ぶ全長8700kmが対象。申請国は中国、カザフスタン、キリギスの3国共同提案です。

そこに含まれる要素は、玄奘三蔵がインドから持ち帰った経典を収めた「大雁塔」や「麦積山石窟寺」など中国22

カ所、カザフスタン8カ所、キリギス3カ所の系3カ所に及びます。世界遺産諮問会議は「当時のシルクロードの繁栄ぶりを示し、人的交流や思想の伝達の役に立ったことも分る」とのコメントを出しています。

シルクロード大好き人間の私にとっては感無量、まずは祝杯を傾けた次第です。この際、悠久のシルクロード、その一端を記してみたいと思います。

中国の漢の時代から、特産の絹を中央アジアからペルシャなどへ運んだ「絹の道」を一般的に「シルクロード」といいます。中国から文化を西に運ぶという中国優位の発想がありますが、その始まりは「ペルシャ発、中央アジア南部・天山経由でアルタイ（現モンゴル）」です。

西のペルシャやギリシャが東の中国の存在を知らず、中国も西のペルシャやギリシャを知らない時代に東西を結ぶ要害にアルタイがありました。秦が滅び、項羽と劉邦が争って劉邦が漢を興した時代、北には匈奴という騎馬民族が勢力を伸ばしていました。かつてその領土は、東はモンゴル高原から西はハンガリーのドナウ高原まで広がっていたようです。

漢は、その騎馬遊牧民族の雄、匈奴に金や絹布を貢物として使者にもたせていました。騎馬に絹は不要な匈奴は絹を欲しがると西アジアへ売っていました。その使者のなかに張騫や中行説がいました。

張騫は13年の長きにわたって匈奴に留め置かれていたため、漢に戻った後、西アジア方面に多くの国があることを報告しました。漢の武帝はその情報をもとに周辺国と手を結んで匈奴を攻め落とそうとしますが、匈奴もそれらの国々と交流を結んでおり、漢の思い通りになりません。やがて後漢の中ごろ（紀元100年ごろ）匈奴はようやく消滅します。

今回世界遺産に認定される「シルクロード」は前2世紀～紀元1世紀ということですから、ちょうど漢と匈奴が並立していた時代の遺産です。本格的な東西の交易が盛んになり、文化の隆盛を見るのは後漢が滅亡し、三国時代・晋・南北朝時代を経た隋・唐になってからと思われるようです。ちょうどその頃、日本からは遣隋使や遣唐使が派遣されて国の諸制度や仏教が伝来。正倉院御物を代表とする文物などが重なり「シルクロード」人気定着したのではないのでしょうか。

しかし、実際の東西交易は隋・唐の時代より800年以前から始まっていたのです。その頃世界ではローマがイタリア半島を統一（前270年ごろ）し、アレクサンダー大王の東方遠征、イランの征服（前330年）など。日本は弥生時代でした。時代の落差を感じます。次に今般のシルクロードの幕開け時代に関係ある人物を挙げてみます。

司馬遷（紀元前145～前93年）

前漢の武帝に仕えた史官。父司馬談の後を継いで「史記」を完成した。国中を広く旅行して実情を認識したが西域や匈奴には直接足を運んでいない。「史記」は秩序だって構成されており、伝説上の五帝から武帝に至るまでの重要な出来事を年代記風に叙述した「本紀」と人物の伝記や異国の事情を記した「史記」から成る。前99年、匈奴との戦いで善戦むなく捕虜になった李陵を一人で弁護したことで武帝の逆鱗に触れ宮刑に処された。

玄奘三蔵（602～664年）

玄奘は仏典の研究には原典に拠るべきであると考

え、また仏跡の巡礼を志し、隋王朝に変わって新しく成立した唐王朝に出国の許可を求めた。しかし、当時は唐王朝が成立して間もない時期で、国内の情勢が不安定だった事情から出国の許可が下りなかったため、玄奘は国禁を犯して密かに出国。役人の監視を逃れながら河西回廊を経て高昌に至った。

高昌王である麴文泰は熱心な仏教徒であったことも手伝い、玄奘を金銭面で援助した。玄奘は西域の商人らに混じって天山南路の途中から峠を越えて天山北路へとルートを辿って中央アジアの旅を続け、ガンジス川を越えてインドに至った。

ナーランダ大学では戒賢に師事して唯識を学んだ。ヴァルダナ朝の王ハルシャ・ヴァルダナの保護を受け、ハルシャ王へも進講している。こうして学問を修めた後、西域南道を経て帰国。出国から16年を経た645年、657部の経典を長安に持ち帰った。幸い、玄奘が帰国した時には唐の情勢が大きく変わっており、時の皇帝・太宗も玄奘の業績を高く評価した。

彼は国外から持ち帰った経典の翻訳を第一の使命と考えた。また報告書「大唐西域記」を編纂し、皇帝に提出した。持ち帰った膨大な経典の翻訳に余生の全てを捧げた。さらに、持ち帰った経典や仏像などを保存する建物の建設を次の皇帝・高宗に進言し、652年大慈恩寺に大雁塔が建立された。玄奘は経典群の中で最も重要とされる「大般若経」の翻訳を完成させた百日後(664年3月7日)に玉華宮で寂した。

冒頓(在位前209～174年)

匈奴の単于(頭目)。一代でユーラシア草原東部に最初で強大な遊牧国家を作り上げた。即位直後、匈奴より強勢であった東方の東胡と西方の月氏を打ち破り、東は興安嶺から西はタリム盆地まで勢力を伸ばした。この時期、中国では劉邦と項羽が死闘を繰り広げ、劉邦が勝利し、漢を創立した時期。

やがて劉邦と冒頓は直接対決する。劉邦は匈奴軍に包囲されたが、膨大な貢物を差し出して和睦した。その後両国は不安定ながら和睦状態を保つ。漢から絹織物、匈奴から馬を、絹馬交易が始まる。

張騫(前100年ごろのひと)

漢の武帝は匈奴を包囲して押さえ込むため、相手に匈奴北方の月氏を選んだ。張騫を使者に立てたが、



玄奘が持ち帰った経典が収められている大慈恩寺大雁塔
(中国陝西省西安市)「中国百度」より転載

匈奴の領地を越える時、秘密を見破られて捉えられた。単于は度胸のいい張騫に妻を与えた。約10年が過ぎ、子供も生まれた。やがて監視の間を見て脱出、月氏に向かった。

途中で大宛に立ち寄る。漢に友好的な大宛の支援で無事月氏に着いた。しかし月氏は漢と協力して匈奴を打つことに同意せず、結局張騫は手ぶらで帰国することになるがその帰途再び匈奴に捕えられた。

おりしも匈奴は単于が死んだ後の後継者選びで混乱していた時で隙を見て間へ逃げ帰ることができた。本来の仕事は出来なかったが、彼は大きな副産物をもたらした。漢が全く知らなかった中央アジアから西アジア地域の情勢(兵力・産物・地利等)の情報である。中央アジア・西アジアの知識に関して、張騫は後の玄奘と双璧といえる。

中行説(前2世紀前半のひと)

漢から匈奴に派遣されたが、そのまま冒頓単于に仕える。中行は匈奴の内政・外交など様々な分野で匈奴のための提言を行なう。彼は匈奴と隣り合わせの燕の生まれなので、匈奴の生活様式や社会制度を熟知していた。漢の使者の要望をことごとく退け、匈奴に尽くした。

【後記】

この文を書きながら、中国は心の底から「中華」であり「中国」なんだな～と思いました。

南蛮とか東夷・西戎・北狄、そして匈奴など。周辺の国や民族をあらわす文字は漢和辞典を見るまでもなく「ウエカラメセン」です。この考えは現在も変わっていないと感じるのは私だけでしょうか。